

美作(後南朝と菅家)探訪記

会員 山崎泰二

(一) 身近な繋がり

私が進めているエコちゃん(生ごみを堆肥化にする手作り装置)仲間、一回り先輩の田中夫妻宅に、全国紙「歴史探究 10月号」に掲載された私の拙文を渡辺先輩のも含めて、お二人に届けに上がった。このお二人は原尾島界隈の、自宅での家庭菜園を勤しみながら、老人会のお世話等地域活動にも余念がなく、私の歴史系の話を心地よく聴いていただけるそんな気さくな仲間である。田中宅に上がり奥さんの茶菓のもてなしの会話の中で、意外な方向に発展した。古稀を迎えた私もこの夫妻の前では若造の仲間ではあるが、知的な会話は何時もお互いに得るものがあるようで歓待していただいている。

田中氏が部屋の隅で何か資料を探している。氏が奥さんの実家へ初めて挨拶に伺った折に、今は亡きお父様から聴いたことを懐かしく思い出したとの事である。私が後南朝の研究をしていることに絡んで、その後義父になる当主から、法然所縁の誕生寺に昭和9年に建立された「南朝作州七忠臣並忠死忠魂碑」に我家も末裔として載っている家柄であることを知らされた。その後境内にあった碑は、新しい第2駐車場に平成17年に移設されたが、新婚のお二人が誕生寺の謂れの忠魂碑に手を合わせたのが懐かしそうに思い出され、一瞬お二人の顔が薄赤くなった。二人だけの思い出までは言葉にはならなかった。

碑の台には関係者の大勢の名前が記されているが、その中に「原田三河守佐秀(すけひで)」の後裔及び縁故者一覧の中に小原住人延原〇〇と刻まれているとの記憶である。それ以上は、ご夫妻は思い出せない様子。お父様から詳しくお聴きのことと思うが若い

お二人はそれから長い人生を歩んできた。これだけ諳んじているだけでもたいしたものだと関心しながら、私の浅学で「それは菅原道真の末裔で菅家七流の一族が大正天皇から正五位を追贈された慶事を記念して七家を統合した忠魂碑が誕生寺に建立された」ことを説明して納得いただく。私は「近いうちに菅家七流一族のことをテーマにして纏めたものを作りましょう」と約束し、この話を締めくくった。

話は進み奥さんのお母さんの実家が東手の尾根の頂上に近い是里(こりさと)で、集落は「物理=もどろい」と称する曲がりくねった山奥に母方の里があり井上姓が多く、何故こんなところに住むようになったのか子供心に不思議であったと、その頃を回想し、親から「井上一族はその昔には武士で戦いに敗れてこの物理(もどろい)の里に隠れ住んで今日がある」と聞かされ、何時の時代のどの戦かは知らされなかった。との事である。「先祖は信州長野では」と話を向けると大きくうなずいて「井上かやた」(=正式には井上賀弥太で秀男氏の実父)の名前を覚えているとの事であった。

実は日本先史古代研究会の仲間、「きび考」5号に井上秀男氏が物理在住の井上一族の仲間と信州長野を探訪した文章を掲載され、当地との交流の様子を知っている。そのことを話すと田中夫妻は、大感激され是非“きび考”を拝読したいとの事である。ひょっとすると田中氏の奥さんの母方の実家が井上秀男氏の分家である可能性も出てきた。井上氏と私は特別に入魂で酒席での話題がまた深まりそうで楽しい限りである。(井上氏は岡山歴史研究会の運営委員)

そこで仲間と秋の美作路を謂れの故地の探訪を企画した。

(二) 紅葉を求めて美作路に出立

田中夫妻と仲間の井上秀男氏を案内役にそして車の運転は樋口俊介氏、共に歴史系の仲間である。11月20日早朝より出発した。先ず最初は道順で誕生寺に向かう。それでも岡山からは1時間たっぷりかかる。参加者は若くて60代、上は80代になる外見は立派な初老ばかりであるが、子供の頃の遠足のあの小躍（こおど）りする昂揚感はいくら歳を重ねても変わらない。小休止で停車すると新しく岡山市に編入され今は北区と称する県の中心域に来ていた。志呂神社を過ぎて旧久米南町に入った。樋口氏が「この近くに親友が居る」と携帯を掛け、なにやら話が弾んでいる。神目支館長をしている松田洋司氏のような。

「仲間が来ているのならすぐに行く」と誕生寺で合流することになった。国道53号線から門前の小径に入ると誕生時の境内だ。駐車は「忠魂碑」の隣に横付けする。

(三) 誕生寺

岡山県には宗教家が多く育っている。その中でも浄土宗の開祖法然上人は後継者の親鸞と共に鎌倉時代に新しく民衆に仏教の道を広めたことは衆知の通りである。このお寺には地元の檀家が少ないと聴く。浄土宗の「特別寺院」として別格の扱いを受けての浄財で、多くの文化財に指定されている塔坊や仏像の多くが、後世の我々に極楽浄土への想いを誘っている。そうした信仰の波が絶えることはない。

法然が生まれたのは、源の姓を改めて漆間と名乗り美作国久米の押領使としての武士の家柄である父（時国）と、母方は秦氏（古代有力な渡来系氏族で岡山には痕跡が多い）で、母の姉は菅家に嫁ぎ実家は奈義で住職をしていた、そんな親族の中で育った。しかし九歳の折に父時国が配下の遺恨による夜襲で深手を負い落命する。息子の勢至丸（後の

法然）に「父の恨のために敵を倒せば、その遺恨が続くことになる」と悟した。息子勢至丸は母方の叔父で、奈義にある菩提寺の院主観覚得業に弟子入りし15歳で比叡山延暦寺で天台宗を学んだとされています。

誕生寺の境内は秋の盛りで大銀杏の紅葉を囲んで多くの画筆を持った仲間にも囲まれていました。境内奥深い所には田中婦人の実家である延原家の古い墓所も囲みの中にあり、見所は付きません。当日は文化財の保護をする防災設備の点検を当社の社員が担当しホース等を拵げていました。偶然の出来事でした。

(四) 菅家七流忠魂碑のこと

菅原道真公の末裔で三穂太郎のことは後述しますが、その子孫が後醍醐天皇の時代に忠義を果たした活躍が、大正天皇に追贈され、その忠魂碑が誕生寺に建立されている。今回の探訪の目的の一つはこの碑を確認し先祖の御霊（みたま）に拝したいとの願いを届けた仲間が集った。



忠魂碑 田中康之氏撮影

菅原満佐三穂太郎には7人の子供が居り、作州地域でそれぞれの領地に城を持ち有力豪族として勢力を伸ばしていた。以後は地名を取って名乗って今日に至る。

元弘三年（1333）二月、伯耆国の船上山に名和長年は隠岐から脱出した後醍醐天皇を迎え近隣の各地に檄を發します。美作菅家はこの時、一族揃って義兵を上げ鎌倉政權（北条）を倒幕し建武政權が樹立することになります。赤松円心や児島高德の活躍は『太平記』の名場面です。菅家一族は総数 1500 余名内騎馬武者 300 余が参戦します。京の都での戦いは元弘三年春三月奮迅な活躍で「壮烈悲絶物凄し・・・」と、この忠魂碑を建てた漆間徳定誕生寺住職は『梅花余香』に書き残しています。しかしこの戦いの中で菅家七流一族の最期は「27 名皆潔く討死」し、南朝の礎（いしずえ）として消えて行ったのであります。

この論功が大正 4 年 11 月 10 日に特旨を以って先ず有元佐弘（満佐の曾孫＝菅家の宗家）弟の有元佐光が従四位をそして次の弟である有元佐吉が正五位を贈与され、大正 8 年 11 月 15 日には植月重佐と鷹取種佐が正五位を、最後に大正 13 年 2 月 11 日に福光佐長と原田佐秀（すけひで）が追贈されます。

昭和 7 年 1 1 月に原田佐秀の追贈記念碑が旧真庭郡木山村大字鹿田の眞光寺に建立し特旨の御沙汰書は諏訪神社に奉納されたとの記録があり、田中氏が現在の眞光寺住職に電話で問うたところ、お寺には無いとの返事であり、真相究明には詳しく調べる必用もありそうです。歳月の流れは遺憾ともし難いものであります。

昭和 9 年になり菅家七流の一族と関係の深い（法然上人の母が秦氏の姉妹で片方の姉妹が菅家に嫁いでいる）誕生寺の住職らが発起人となりこの忠魂碑が建立されます。当時の浄財 2500 円で同年 9 月 4 日午前 11 時に除幕式が執り行われました。この原田佐秀の一族に田中夫人のお父さんが居てこの忠魂碑建

設に浄財を寄贈されていることが刻まれています。



岳父延原鞏男氏の名前を田中氏が発見

今回の参加者が碑文を調べていると、松田氏も到着し、しばらく同行する。

（五）井上家先祖碑のこと

井上家のことは“きび考”第 5 号に今回同行の井上秀男氏が寄稿され、詳しく書かれているので省略するが、田中氏の奥さんの母方の里が井上秀男家の分家で、現在は田中夫人の義理の従兄婦人がお一人で家を守っているとのこと。秀男氏と田中婦人は血の繋がった身内であった。車での移動では道も新しくそして広くなり、時間もかからなかったが、婦人が母親に連れられて登って来た小路は、急な坂を上がり碑の立っている界限に面影が残っていた。それにしても立派な先祖碑である。裏面の謂れ文は井上氏のお父さんによるもので達筆な刻印がなされている。



井上家の屋敷内には祠が祭られている

井上氏の実家は、今は空き家になっているが、

お父さんが郷土史家だけに屋敷にも祠があって子供の頃に遊んだ古木に腰掛けたことを、懐かしそうに語る井上氏の口元は、童顔になっている。

楽しみに待っていてくれた分家の老婦人が土産に準備してくれたお手製の「栗おこわ」を全員に戴く。清らかな棚田で採れたお米と、この山里に自生している柴クリの渋皮を丁寧に剥き気持ちのこもった「おこわ」は最高の歓待であった。お気持ちと共に戴いて帰路に立つ。車が足早に去るのを庭先に出て一人手を振る婦人に哀愁の秋を感じた。

(六) 美作南朝終焉の地

第96代後醍醐天皇（南朝）は孫の第99代後龜山天皇で終わり第100代後小松天皇から今日まで北朝系の天皇家が正史として続いている。南朝は吉野にて消滅したことになるが、実は隠された南朝の歴史がこの美作に存在する。津山市の東隣に植月なる地名が現存するが、そこに後醍醐天皇の孫の親王が御所を構えて254年間皇籍を保持し、その事実を時の政権に抹殺された痕跡が残っている。その一つが今回訪問した終焉の地である。

背景の山の上に周匝のお城が見える

古木の榎木 すぐ下に石の祠がある



美作後南朝終焉の地 史跡碑が並ぶ

この写真の反対側の山に月の輪古墳が存在

美作後南朝第九代良懷（よしやす）親王（こ

の時点では皇籍を離脱され平民）が宝永6年（1709）正月轢死（横死）し埋葬された地が現在の久米郡美咲町飯岡（ゆうか）の田圃の中に存在する。地元民からは「我王さまの墓」として今の写真に残る榎木とその下に小さな石の祠があり、森家所縁の我原家が代々墓守をしていたと聴く。

立派な碑文は後に同じく美作後南朝の末裔で後醍醐天皇から26代当主流王（りゅうおう）農（あつし）氏とその娘（弘子）さんが平成11年から12年に建立されたものである。流王家も平民に降り県北を中心に末裔が点在するが、王の流れを苗字にして遺徳を伝えている。

美作後南朝の歴史は250年間に及び、その上歴代の北朝系支配者から弾圧を受け、当然正史や一時保護をした森家の歴史書にも登場しない。

正史南朝最後の第99代後龜山天皇からその孫の尊義（たかよし）親王は三種の神器を奪回し美作の植月にて第101代高福（こうふく）天皇として10月29日即位します。年号も嘉吉から天靖（てんせい）と改元（1443）され美作後南朝初代であります。以後屈折はありますが、地元有力武家等（菅家など）に保護されて統皇を続けます。

関が原合戦後慶長8年（1603）森忠政が津山に18万6,500石の大名として入府しますが、アンチ徳川の毛利や宇喜多の残党や後南朝を守護する有力部将も控えています。結局「美作南朝を守る」約束の上で統治を進め津山城下の整備を行います。忠政は7千石で植月御所を守りましたから（徳川家は天皇家に2万石の扶持を与えたといいます）相当の厚遇をしていたこととなります。

しかし残念ながら忠政は寛永11年（1634）7月6日に正史では死亡します。徳川側の公卿による振舞＝宴会で出された桃を食した直後から苦しみだしそのまま死亡したとす

る正史を信じれない、多くの遺臣が居りました。その時点で第8代高仁（たかひと）天皇は廃帝になります。徳川家康の孫娘和子（まさこ）が生んだ明正女帝（第109代）が後水尾天皇（第108代）の跡を継ぎ今日に繋がっています。

忠政死後森家には不幸が続きます。結局元禄10年（1697）95年続いた津山藩の森家は断絶し、2万石で播州赤穂に移封（実質上のお家断絶）になりますが、正史では淡々とした列記に過ぎません。真相は「大変な隠された歴史」が展開していたのです。美作後南朝第9代の良懷親王もこの時点で、王号（親王と称すること）を剥奪され平民となり「我王」と自称していたようです。津山藩（当時は松平家）の支援もなく、冒頭に述べた通り宝永6年吉井川の佐伯鴻ノ瀬で、43歳で横死し美作南朝の歴史を閉じます。

(七) 『^{じんよ}燼余の八咫鏡^{やたのかがみ}』出土地

私の手元に赤間神宮が昭和60年1月10日に第81代安徳天皇没『源平八百年記念八咫鏡』なる特別号の小冊子があります。これは主に発掘された春名義雄氏の手記を基本にして、春名氏がこの神鏡を赤間神宮に奉納された経緯などが記されています。



赤間神宮拝殿(下関市壇ノ浦)



八咫鏡発掘並奉献者春名義雄殿 頌徳碑

先ず発掘の経緯ですが、今から54年前の

昭和33年7月13日午後4時30分に地元土居町文化財保護委員の春名義雄氏が中心となって、古誌を調べたその通りの場所にて発掘されました。源平盛衰記で有名な妹尾兼康の末裔が、植月御所の大庄屋をしていて土居の地で代々居住しており近年本家は離散し分家筋が戦後も住んでいます。その妹尾家に伝わることを江戸の末期に編纂された『東作誌』や『作陽誌』が再度発見され、明治大正年間にも多くの研究者が著作されているものがかろうじて残っています。その一部として発見者の春名氏が残した文によると、概略次のようです。

「平家一族が長門の壇ノ浦で安徳天皇を擁して三種の神器と共に海に沈まんとした時、神璽は源氏方に拾われ北朝に収まり、神剣は海に沈んだが八咫の鏡は平家側にいた妹尾兼康の身内が拾い上げ源氏の追っ手を逃れ土居の山中に隠れ住み宝物を守りその後大庄屋として代々栄えた。土居の多和山麓の通称天皇谷の地に『安徳天皇社平の宮』として埋納した燼余の鏡の上に小祠を建てて記録に残した。」

その他にも田中千秋説・原三正説など諸説がありますが、共通点は古い書物に記載されその場所にて発見された事実です。発見者の春名氏の尽力により専門家の鑑定で年代的にも歴史書の伝えと合致し「燼余の八咫の鏡」と判定され、当時の新聞に大きく報道されるに至ります。住民の中からこの「お宝」を奉納する美作神宮建造の話が持ち上がるなど大騒ぎになった。発見者の春名氏は安徳天皇を祭る旧官幣大社の赤間神宮に奉納するのが妥当だとして、地元と意見が別れ所有権を求めて裁判沙汰になりましたが、結局現在壇ノ浦の赤間神宮に奉還され神器として大切に保管され、拝殿の右正面に大きな頌徳碑に「言われ書」を碑文にして建立されています。出土した県境の国道にも大きな看板と

出土地には記念碑や写真が地元の皆さんに依って守られています。是非立ち寄って戴きたいし。長門の赤間神宮にも参拝をお薦めします。



発掘現地(万能峠付近)の碑

我々は途中で合流した濱手英之氏の先導で、植月御所（美作市高根鳥羽野）境界にある萬福寺（美作南朝7代尊純天皇は植月御所内の高福寺を現在地＝鳥羽野に再建し萬福寺と改称の上弟の見政院法親王を初代住職にし、次の代も弟をこの寺の住職にしている）などを探索する。付近には立派な宝篋院塔のお墓が末裔の方に守られて新しいお花が供えてあった。



立派な宝篋院塔のお墓 近くに萬福寺もある

(八) 菅原三穂太郎満佐神社

菅原道真公の先祖が美作に任地を持ち善政を行っていたこともあって、道真公の子孫は美作奈義周辺の小城主として勢力を拡大し土地の名前を姓にしていた。

満佐は道真から 14 代で三穂（さんぽ・さ

んぷ）太郎と称し、7 人の子供が居た。博学で住民の尊敬を得ており伝説も多く残っている。三穂太郎は三歩で京まで行ったとの巨人伝説が有名な話である。本人は従五位下玄蕃頭に任ぜられ善政を行ったと伝えられている。



三穂太郎満佐の立像

先に述べた菅家七流家は満佐の子供達を家祖として、各地の城主として活躍していた。後醍醐天皇が隠岐から脱出し伯耆大山の麓の御厨に上陸し船上山で名和長年を棟梁に近隣に檄を飛ばし、菅家は宗家の有元（有本）家は一族を挙げて参戦します。

戦国時代も国人として力を保持し、江戸期に入っても森忠政との関わりの中で、植月御所を守り三種の神器を三度も美作植月御所に奉賛しています。末裔の菅直人氏は総理大臣にもなっています。

三穂神社の近くには「岬大明神」「杉大明神」があり三穂太郎を祀っているが、時間も遅くなったので濱手氏とここで別れ帰路に付く。



誕生寺の忠魂碑で(田中筆者田中夫人井上樋口)